2023. 11　第3号
一般財団法人　ゆうちょ財団
国際ボランティア支援事業部

NGO海外援助活動助成

NEWSレター

（写真1） コロゴッチョの女性グループ

NGO活動紹介

特定非営利活動法人
Little Bees
International

スラムの人々に”自律”と”自立”に基づく生きる力を！

ケニアの首都ナイロビでは、中国の投資を中心にした大規模なインフラ整備や開発が進行中です。しかし、一方では貧富の差が大きく広がり、失業率も高いため、多くの人々が極度の貧困状態で生活を強いられています。

コロゴッチョ・スラムはナイロビの郊外に位置し、約20万人の人々が1日わずか1.25ドル（約190円）以下で生計を立てています。この地域の名前はスワヒリ語で「useless（役に立たない）」を意味し、その名が示す通り、ここに住む人々は差別的な扱いを受けてきました。

Little Bees International(LBI)は、コロゴッチョ・スラムに住む女性と子供たちに、甘えではなく”自律”と”自立”に基づいた生きる力を育てることをミッションとして設立されました。現在、この団体はコロゴッチョ・スラムの住民を対象に、女性の雇用支援、持続可能な環境整備、HIV予防啓発とケア、子供たちの教育支援、東北被災地でのアフリカ・スラムの人々との交流事業など、さまざまなプロジェクトを展開しています。

ゆうちょ財団は、この団体が取り組んでいる、HIV陽性の女性やシングルマザーの収入向上と自立を目指す「リサイクルバッグ製作」プロジェクトを2022年度と2023年度に支援しています。このプロジェクトは、ナイロビ市のジーンズ工場から出る余剰のデニム生地を利用して、女性たちが子どもたちのためのバッグを作り、販売するものです。

ゆうちょ財団は、このたび同団体の代表理事の高橋郷さんに、これまでの活動と今後の展望についてインタビューしました。

（写真2） 環境セミナーで講師を務める高橋さん

――団体の名前にある”**Little Bees（小さなハチ）”に込められた思い**について教えて下さい。

高橋さん：もともと団体名を考えるときに、日本の側でも候補がいくつかあったのですが、やはり現地のための活動っていうのが第一にありましたので、現地の人たちにつけてもらいました。

アフリカではハチは勤勉さの象徴なんですね。なおかつ、あのハチたちが集まって、大きな巣を作っているのですが、私たち一人一人も、そうしたハチのように小さな存在にすぎないけれども、みんなで集まって協力して頑張っていけば、ハチの巣のような大きな成果を生み出すことができると、そうした願いが込められています。

（写真3）リサイクルバッグの縫製を行う女性たちと
日本人スタッフ(左から3人目)

――そもそもこの”**コロゴッチョ・スラム”に着目したきっかけ**を教えて下さい。

高橋さん：2012年の話ですが、私は外務省のNGO研修でアフリカの国際機関に派遣されていました。現地のことをもっとリアルに知りたいという思いを持ちつつも、きれいなオフィスで、日々悶々と過ごしていました。ある日、 ナイロビの中央公園でスラムの女性たちに母子保健手帳の説明をしていたソーシャルワーカーの人と偶々知り合って、お話を聞くと、どうも環境が悪い所で外国人、支援団体も来てくれない場所があり、一緒に来ないかと誘われたわけです。それがコロゴッチョ・スラムとの出会いでした。

怖いと思いつつも関心があったので、ついて行きました。行ってみると、フンを塗って作ったような土壁の家とかもあるすごい住環境でした。しかし、住民の一人一人とお話して行くと、すごくあたたかい感じがするんですね。よく来てくれたねって言って、何もないはずなのにいろんなものを出してくれました。研修が終わって私が日本に帰るときにもお別れ会も開いてくれました。そういうことがすごく嬉しくて、何か行動しようと思ったのがコロゴッチョ・スラムに着目したきっかけになりました。

――活動地のケニヤは、日本からかなり遠いという以外にも気候･風土･文化その他いろんな違いがあると思いますが、**支援を行うにあたり、何か障害になるもの**がありましたか。

高橋さん：お互いに支えあったり、励まし合ったりして過ごす中で、アフリカ人だからとか、あるいはその逆に、私たちがアジア人だからという意識は、さほど感じなくなってきていて、文化とか慣習風習、言葉の違いは、人間同士がお互い分かり合う上で、それほど大きな障害にならないと実感しています。

アフリカに対してよりも、むしろスラムという生活環境のほうが、活動当初は相当きつく感じました。ギャングみたいな人もいるわけで、治安の問題もありますし、水など劣悪な衛生環境の問題もあります。

コロゴッチョの人々は、そういった環境の中でも、タフで逞しく、しなやかに生きています。そんな人たちにすごく魅せられ支えられて、ここまで来ることができたと感じています。

――Little Bees Internationalは、発足して丁度10年経ったところと伺っていますが、発足当初から現在までの間に、**コロゴッチョの人々に変化**――例えば、環境意識の変化や自立心の芽生えといったもの――が見られますか。

高橋さん：活動を始めた当時には、とにかく生活の援助が欲しいという声がすごく多くありました。しかし、コロゴッチョは1980年代に、もともと首都ナイロビのゴミ捨て場から発生したスラム地域だったので、空気も水も悪いし、すごくゴミが散らかっているような状況にありましたので、この環境を先ずなんとかしなければいけないということで、環境活動に当初から力を入れて活動しました。住民は最初は環境活動なんて腹の足しにならないと、文句を言いながら活動したところも正直ありましたが、続けていくうちに、例えば植樹活動(写真4)だと、植えた木が大きくなって、緑地の面積も増えて環境の変化を実感できるところがあって、住民の取組みに対する姿勢がすごく前向きになってきました。今では、次の植樹活動がいつになるのかというメッセージが上がってきたりして、とても嬉しく感じています。点でしかなかった活動が、それがつながって線になって、輪になって広がっているということが、すごく実感出来ています。

（写真4） 住民による植樹活動

（写真5） 直売所でのバッグの販売

――2022年度と2023年度にゆうちょ財団が助成した活動は、**「循環型社会形成を目指したリサイクルバックの製作による貧困層の女性と子どもたちのエンパワーメント事業」**で、具体的には、子どもたちのためのスクールバッグを女性たちが縫製し、子どもたちに無償配布したり、販売しているところですが、**現在の状況と品質の向上と販売数の増加のための方策**について教えて下さい。

高橋さん：地域の中に販売所を設置して、販売活動も、直接行っていますが(写真5)、一か月あたり100から200ぐらいのバッグが売れています。アドボカシー・メッセージ付きのバッグも人気がありますが、売上げの主力となるリサイクル・スクールバッグは、1月から始まる新学年・新学期の前のはざ間に一番よく売れます。これからその新学期に向けて縫製活動の方も頑張ります。LBIブランドのバッグとして地域の人たちに愛され、そこから幅広く需要に繋がってくれればと願っています。バッグの品質の向上も大切だと感じており、日本のNGOでケニアで30年近い活動実績のあるアフリカ児童教育基金の作業場の方もお借りして、専門技術を持った方の指導を受けたりしながら、今年と2020年の1月に縫製技術の研修も行っています。もちろん、各々の女性たちが厳しいコミュニティ環境で生活して行く中で、少しでも物心両面での負担が軽くなるような、そうした和気あいあいとする場、エンパワーメントの場の創出を目指した活動ですので、技術的に未熟な方でも、喜んで受け入れています。

――現在、女性たちが縫製し、販売しているリサイクルのスクールバッグには、「Stop Child Labors!」や「Stop DV」といったメッセージ(写真6)をつけ、アドボカシー効果も狙っていると聞いています。アドボカシーの言葉の中には**「MOTTAINAI(もったいない)」も見えますが、こうした日本流の考え方は現地ではどう受け止められているのでしょうか。**

高橋さん：LBIとしては、日本の団体ということもありますので、もちろん物を大切するのもそうなんですが、その他に合わせて友だち、隣近所の方たち、仲間を大切にしよう、それから時間を大切にしようというメッセージを込めて、MOTTAINAIソングというのを作って、環境事業の時に歌ったりしています。特にこの歌が子ども達に大人気で、コロゴッチョを歩いているとMOTTAINAIとか声をかけられることがあります。それがすごく嬉しかったりするんですが、日本人としても、「もったいない」の精神が遠くアフリカ・ケニアに伝わっていることを、とてもうれしく、誇らしく感じています。

このMOTTAINAIはもともとケニア人であるワンガリ・マータイ博士が提唱したもので、マータイ博士はアフリカ人女性初のノーベル平和賞受賞者です。残念ながら東日本大震災にあった年2011年にご逝去されましたが、今でも絶大な人気があります。博士がケニアに伝えたものとして、今でも残って続いているものの一つがグリーン・ベルト・ムーブメント（植樹活動）で、もう一つがMOTTAINAIになります。

（写真6）様々なアドボカシー・メッセージ

MOTTAINAIはマータイ博士がCOP気候変動会議の関係で京都にいらっしゃったときに、「もったいない」という言葉に触れて、なんて素晴らしい考えなんだろうと感動されて、ケニアに持ってきていただいたっていうのが土台にあります。物を大切にする心の表現として、現地にも伝わっているわけですが、日本から伝わったものというより、今ではマータイ博士の言葉として理解されているような気がします。

――最後に、**Little Bees Internationalの将来的な展望や計画**はどのようなものですか。新たなプロジェクトや目標があれば教えていただけますか。

高橋さん：とかくアフリカについては、部族社会で表現されがちなところもあると思いますが、そうした部族とか言語あるいは文化の違い、そういうものを乗り越えて、誰もがそこに生まれ育ったことに誇りを持てる、平和で持続可能なコミュニティを作り出すことが、最終的な目標としてあります。

LBIは本年が丁度十周年を迎えたところでもありますが、私たちは、誰もが仲良く、いろんなつらいことがたくさんあったとしても、笑顔でお互いに支え合って暮らせる共生社会の実現というのを目指して活動を行っているわけです。どんなバックグラウンドの子ども達でも分け隔てなく受け入れる私たちの小学校であるアマニ教育センターもそうした理念で行っています。卒業した子どもたちが元気に社会に羽ばたいていくのはもちろん、コミュニティの子どもたちのロールモデルともなってもらいたいと考えています。

また環境活動として、コロゴッチョの中心部を流れるナイロビ川周辺に、これまでの十年で9000本近い木を植えてきましたが、これを1万本、2万本と増やして住民の憩いの場、安らぎの場であるグリーンパークを広げていきたいと思います。

女性グループについては、バッグ活動を通じて自立を目指すのが最終的なゴールになります。

最後に、コロゴッチョという言葉自体がすごくネガティブな意味をもっているので、これを払しょくしたいと思っています。差別的な扱いをされるのではなくて、尊重されて「コロゴッチョっていいよね」と言ってもらえるようなコミュニティになればいいと思います。

私たちも日本からのバックアップ・支援の方を頑張っていきたいと思っております。

――高橋さん、熱意のこもったお答え、ありがとうございました。

TOPICS

2024年度NGO海外援助活動助成募集について

2024年度NGO海外援助活動助成の申請を募集しています。これは、過去に「旧国際ボランティア貯金」の寄附金配分又は「JICA基金」の支援を受けたことがある事業を対象に、NGOの活動経費の一部を助成するものです。助成金は、活動に直接かかる活動費とし、助成総額は1,000万円、助成の上限額は1件あたり100万円とします。 申請は本年10月1日から11月30日まで受け付けています。

＜2024年度募集における主な変更点＞

① 助成対象となる団体の要件に、「直近2年間の収入平均が5,000万円未満の団体であること。」を追加しました。

② 助成対象となる団体の要件で、当財団の「NGO海外援助活動助成」を受けた回数に関し、従来は「5年間(5回)助成を受けた場合は、その後、原則3年間助成申請できない。」としていましたが、これを「3年間(3回)助成を受けた場合は、その後、原則3年間助成申請できない。」に変更しました。

「グローバルフェスタJAPAN 2023」への出展について

「グローバルフェスタJAPAN」は国際協力活動、社会貢献活動、SDGsなどに取り組む官民様々な団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントで、2023年度は9月30日と10月1日の2日間、有楽町の東京国際フォーラムで開催されました。

ゆうちょ財団は、本年度もNGO、大使館、国際機関、大学、企業等と並んでブースを構え、NGOを助成していることや2024年度NGO海外援助活動助成の募集について周知を行い、2023年度の活動の写真パネルの展示を行いました。

実行委員会事務局によると、昨年を上回る盛況であり、来場は2日間の合計で約21,000人であったとのことです。

（写真7） ゆうちょ財団のブース

編集後記

今回は「特定非営利活動法人 Little Bees International」の取組みを紹介するとともに、「2024年度NGO海外援助活動助成募集について」と、本年9月30日と10月1日に東京国際フォーラムで開催された「グローバルフェスタJAPAN 2023」への出展についてレポートしました。グローバルフェスタでは、NGOの皆様をはじめ多くの方がゆうちょ財団のブースに立ち寄ってくださいました。この場を借りてお礼申し上げます。